

松 城 遺 跡

—平成 15 年度 町道寺町連絡線工事に関わる

埋蔵文化財発掘調査報告書—

2004. 3

北海道松前町教育委員会

例 言

1. 本書は平成15年度に松前町が実施した町道寺町連絡線工事に関わる、松城遺跡（B-02-9）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は平成15年7月1日から平成15年7月29日までの間、次の体制で実施した。

調査主体者：松前町教育委員会 教育長 成 田 稔

調査担当者・調査員：文化財課調査係長 前 田 正 憲

調査作業員：榎館 正子、室田 一美、松谷 圭子、皆月 ユキ、

川森 国弘、高橋キヌ子、彦田恵美子、阿部 雪美、

岡田眞理子、本間あずさ、竹内 照子、河田 敬子、

山本 秀喜、木津 操、木村 浮子、船板 咲枝、

渡辺富士枝、黒谷 麻美、堀 めぐみ、天方 郁代、

野上 正、橋畑 京子

3. 本書の編集・執筆・写真撮影は前田が行なった。
4. 出土遺構の実測・整理・トレースは河田、天方、本間、山本が行なった。
5. 出土遺物の実測・トレースは竹内、榎館、松谷が行なった。
6. 調査期間中、次の諸機関からご指導ご協力をいただいた。
北海道教育委員会、渡島教育局、函館市教育委員会、七飯町教育委員会、
戸井町教育委員会、南茅部町教育委員会、木古内町教育委員会、知内町教育
委員会
7. 調査に関する諸記録・資料は松前町教育委員会が保存・管理する。

目 次

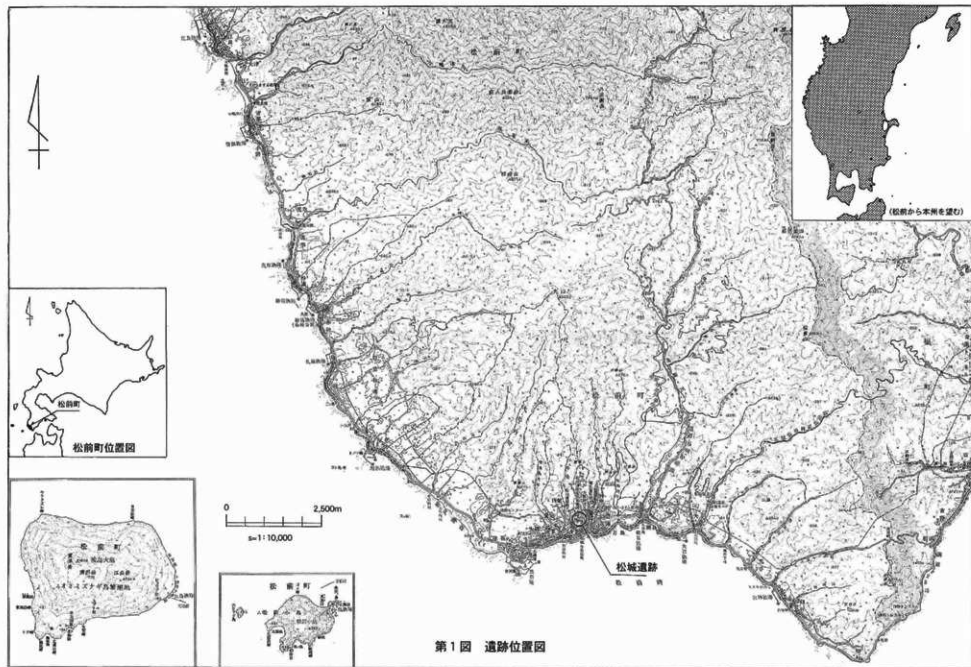
例言	i	・土層堆積状況	6
I はじめに		・粘土探掘跡	8
1. 調査の経緯と経過	1	2) 縄文時代	17
2. 調査の目的と成果	1	・住居跡	17
3. 調査の方法	3	・出土遺物	17
II 調査結果		・土壌	17
1. 遺跡の概要	5	・遺構外出土遺物	27
2. 調査の概要	5	III まとめ	
3. 出土遺構・遺物	5	・近世遺構	37
1) 江戸時代	6	・縄文時代	37
・絵図に見る当時の地形	6	抄録	66

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	iv	第12図 出土土器(2)	23
第2図 調査位置図	2	第13図 出土土器(3)	24
第3図 遺構配置図	4	第14図 出土土器(4)	25
第4図 調査区土層断面図(1)	9	第15図 出土土器(5)	26
第5図 調査区土層断面図(2)	11	第16図 出土土器(1)	28
第6図 調査区土層断面図(3)	13	第17図 出土土器(2)	29
第7図 粘土探掘跡出土遺物	15	第18図 出土土器(3)	30
第8図 HP-1平面図・セクション図・ エレベーション図	16	第19図 出土土器(4)	31
第9図 P-1、P-2平面図・セクション図	18	第20図 出土土器(5)	32
第10図 P-1平面図・セクション図	20	第21図 出土土器(6)	33
第11図 出土土器(1)	22	第22図 出土土器(7)	34
		第23図 出土土器(8)	35

写 真 図 版

図版1 調査開始状況	41	図版14 P-2(1)	54
図版2 遺構確認状況	42	図版15 P-2(2)	55
図版3 SPaラインセクション	43	図版16 P-3	56
図版4 SPc、eラインセクション	44	図版17 完掘状況(1)	57
図版5 SPbラインセクションほか	45	図版18 完掘状況(2)	58
図版6 近世遺構調査状況	46	図版19 完掘状況(3)	59
図版7 近世遺構完掘状況1	47	図版20 出土土器(1~8)	60
図版8 近世遺構完掘状況2	48	図版21 出土土器(9~21)	61
図版9 縄文住居HP-1	49	図版22 出土土器(22~41)	62
図版10 HP-1覆土堆積状況1	50	図版23 出土土器(42~62)	63
図版11 HP-1覆土堆積状況1	51	図版24 出土土器(1~22)	64
図版12 HP-1	52	図版25 出土土器(23~40)	65
図版13 P-1	53		



I はじめに

1. 調査の経緯と経過 (第2図)

町道寺町連絡線の敷設計画は、平成8年度に策定した「史跡福山城保存管理計画書」の中に、重要文化財の保護のための緊急自動車用道路の必要性が述べられ、これに基づいて消防署からの最短コースとして計画された。平成12年度に史跡外の一部河川補修工事と実施設計を行い、ルートと工法が決定された。これに伴って、史跡地内に掛かる部分の工事内容について、平成12年11月7日付けで現状変更等許可申請書を提出し、平成13年1月5日付け委保第4の1238号により許可された。史跡地内に掛かる工事については、平成15年度に盛り土で史跡地表面を保護する工法で行なわれた。また、現在ある仮舗装道路、町道寺町線に接続する部分で若干旧地表面に達する可能性があるため、文化庁に協議をした。その結果、130㎡の調査を町が実施することになった。調査は平成15年7月1日から平成15年7月29日まで実施した。調査終了後、平成15年7月29日付け松教文号により埋蔵文化財発掘調査の「報告」を提出した。

2. 調査の目的と成果 (第3図)

町道寺町連絡線の工事は、橋を渡り史跡地内に進入し、史跡地内では盛り土をした上に道路を敷設していった。しかし、どうしても現仮舗装道路と接続する部分では、路盤工事のため掘削しなければならなかった。そして、接続部分での掘削深度が、旧地表面に達する可能性があるため、遺構の確認の予備調査を実施したのである。安政元年完成時の絵図「福山城見分図」によれば遺構は描かれておらず、予備調査でも、遺構は確認されず、攪乱層が認められただけで、出土遺物も近代と縄文土器が数点であった。しかし、発掘調査の結果、現在ある仮舗装道路、町道寺町線から深さ0.8m程で縄文遺構のプランを確認し、さらに江戸中期と思われる粘土探掘跡を発見した。

出土遺構は、江戸時代中期の粘土探掘跡、そして縄文時代後期の住居跡1基、土壇3基が発見された。特に、江戸中期の粘土探掘跡は、過去の史跡整備事業の本丸発掘調査で「地下蔵様遺構」として報告(久保1990)したことがあったが、今回の調査で土壇などに用いる粘土の探掘跡であることが明らかになってきた。また、この探掘跡には陶磁器類とともに炭化物も大量に埋められており、新城の築城時以前にゴミ捨て穴として利用されていたことが判明した。

出土遺物は、江戸時代中期以降から幕末以前の陶磁器類及び、縄文時代前期後半から晩期までの土器・石器がプラスチックコンテナに入れて30箱出土した。陶磁器類は17世紀後半から18世紀代が多く、縄文時代の遺物は後期が主体であった。

以上のように、新城築城時の盛り土の下位に、縄文時代後期の住居跡とさらにそれを切って江戸時代中期以降の粘土探掘跡が発見されるなど、様々な遺構が複雑に絡み合った調査であった。



第2図 調査位置図

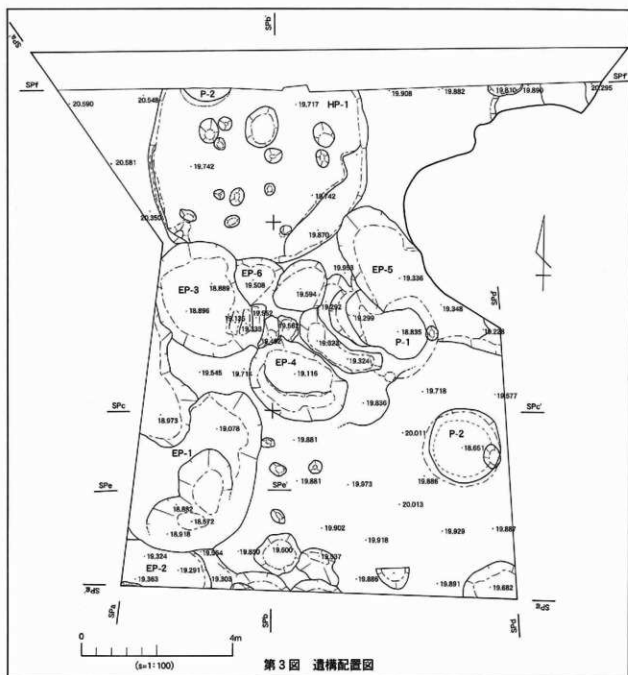
3. 調査の方法

基点を SP180 と SP194 とした。それぞれの座標値は SP180 が $X = -285,645.143817$ $Y = -11,702.551767$ 、SP194 が $X = -285,631.963820$ $Y = -11,707.272749$ であり、これを南北軸としてグリッドを組んだ。南北ピッチは 5m とし SP180 を起点とした。東西はそれぞれの道路範囲とし、土層観察用の畦を残した。全体として不定形のグリッドとなった。発掘調査は草の根の除去から開始した。次に表土の掘削を行い遺物包含層である暗褐色土を確認した。暗褐色土は場所により大きな違いがあった。仮設道路に近いほうには火山灰層が発見されたので一旦掘削を中止したが、標高の低い南側には発見されず、すぐに漸移層となり遺構確認面となった。そこで、南側のプランが明確に発見された遺構から調査を行い、順次北側のグリッド調査へと移行した。出土した各遺構には任意で土層観察用畦を残して調査を行った。グリッドから出土した遺物は土層ごとに取り上げ、集中して出土した遺物は、必要に応じて平面実測を行い、集中個体ごとにレベルを測り取り上げた。遺構から出土した遺物についてはすべて平面実測を行なった。また、土層が観察できる壁面すべてについて土層堆積状況を実測し、それら遺物・遺構・土層の調査状況をすべて 35mm リバーサルフィルムで撮影した。

整理作業については、まず遺物の水洗いを行い、注記は出土点数のすべてについて実施した。出土した土器・陶磁器の復元し、写真実測を行なった。図面類は第二原図を作成し、トレースした。現場で撮影したスライドはすべてナンバリングし、収納した。出土遺物は以下のとおり。

出土遺物集計表

グリッド	土器	石器	縄石器	薄片	礎	その他	陶磁器類	計
A	289	4	9	10	28		169	509
B	695	14	36	23	68	4	154	994
C	57	3	1	8	21	14	147	251
D	648	7	19	17	8	1	98	798
表探等	10				75		274	359
HP-1	392	4	29	7	59			491
P-1	83		14		18	3		118
P-2	746	3	9	16	13	2		789
P-3	46							46
計	2,966	35	117	81	290	24	842	4,355



II 調査結果

1. 遺跡の概要

松城遺跡は史跡背後の寺町一帯に分布し、縄文時代中期から後期にかけての遺跡で、中期前半の円筒上層式が主体と考えられている。立地は海岸段丘の低位から中位面（瀬川1955）の標高20～40mにあり、推定面積は60,000㎡とされている。平成3年度に、今回調査地に隣接する、町道寺町線の仮舗装工事に伴い発掘調査が行われた（久保1992.3）。その概要を述べると、161.3㎡調査し、住居跡3基とフラスコ状ピット1基を発見している。住居跡のうち1基は縄文中期前半でもう1基が縄文後期前半のものである。出土遺物は円筒上層式c～d式、後期初頭の沈線文土器とそれに伴う石器類が出土していた。また、福山城の調査などの、これら過去の調査から、松城遺跡の規模は松城の台地全体に及ぶ15万㎡程が想定され、近年調査を継続している東山遺跡に匹敵する巨大遺跡であると考えられる。

2. 調査の概要

発掘調査は、土層観察用の畦を残し、まず表土の掘削を行い、遺物包含層である暗褐色土を確認した。暗褐色土上面は、調査区の南北で大きな違いがあった。仮設道路に近い北側には火山灰層が発見され、住居跡の可能性があるため一旦掘削を中止した。また、標高の低い南側には発見されず、すぐに漸移層となり遺構確認面となったので、南側のプランが明確に発見された遺構から調査を行った。出土した遺物から江戸期の遺構であることが判明したので、これらをまず重点的に調査した。また、同時に南半で発見された縄文時代後期のP-1、P-2の調査も行った。P-2からは多量の遺物がその覆土から発見された。調査区南半の調査がほぼ終了した段階で、北半の住居跡の調査を開始した。住居跡の北側は道路にかかり調査が出来なかったが、中央に浅い窪みがあり、調査した範囲では掘建て柱跡を4本確認した。また、この住居跡を切ってP-3が発見された。さらに、この東側にもう一基住居と思われる遺構の立ち上がりが確認されたが、調査範囲が狭く判然としなかった。

3. 出土遺構・遺物

出土した遺構は以下のとおりである。

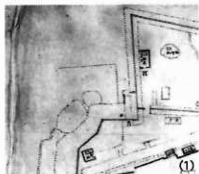
江戸時代

- ・粘土探掘跡 6基（江戸時代中期以降）

縄文時代

- ・住居跡 1基（縄文時代前期後半）
- ・土壇 3基（縄文時代後期）

以下、遺構ごとに述べる。



1) 江戸時代

K.W. 粘土探掘跡、地山削り出し階段、二彩唐津大鉢

抄録

不定形な掘り込みで床面も安定せず、壁面の状態と覆土の堆積状況、そして出土遺物から粘土探掘跡と判断した。地元ではこの土を「ガンベ土」=壁土?と呼ぶ。また、出土遺物も17世紀後半から幕末までと様々で、掘削時期が1様では無いことが判る。

・絵図に見る当時の地形

まず、築城前の文化・文政期と思われる「松前奉行所経営地割図」(1)を見ると、欄列が描かれている。この部位の風景画が「松前自沖口至奉行所図」の本丸北側の法源寺と龍雲院から「土門」を見た図(2)があり、この「土門」にもっと寄った図(3)を見ると、右手の欄列が土塁状の土手の上に構築されていることが判る。したがって、この時期の調査地付近まで土塁のあった可能性がある。次に、嘉永年中の基本構図と思われる「松前城」(4)を見ると欄列が描かれているが、地形は判らない。また、完成時の「福山城見分図」(5)を見ると、道路のすぐ脇に欄列が描かれ、崖地の様な表現がされている。描き方からすると、道路面よりも杉林の方が高かった様であり、文化文政間と同様の地形であった可能性が高い。以上見てきたように、(3)の土塁と欄列の状況がどこまで続いていたかは不明であるが、文化文政期の地形にあまり手を加えることなく築城されたと考えられ、現在見る地形とさほど変化が無いのかも知れない。

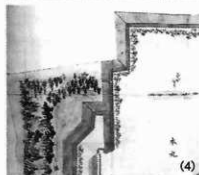
・土層堆積状況

第4図

SP a-a')

調査区西面の土層堆積状況である。土層2.51~53)までは、仮舗装工事と地下埋設電線の埋め戻し上と思われる。土層3~12)のうち、土層3~6)の堆積で一時期ある。また、土層7~12)のうち、土層7.9~10)はその上部が削られている。土層4)は調査時に松が生えていたことから、この松を植え込む際の掘り方なのかとも知れない。

土層13.15~16)の上面は、一時地表に露出していたが、堆積後に削平されたものと思われる。また、土層15.16)の下面には、これらの土砂が堆積する以前に、粘土探掘跡EP-1に堆積した覆土を掘り込んだ痕跡が認められる。あるいは土層10.16~17)が堆積していたところを掘り込んだ後に、土層15)が堆積し、しばらく時間があつたので土層10)が土層15)に被さったのかも知れない。さらに、土層17~29)のまとまった堆積があり、これらの土層より下位の土層30~40)は主として南からの流れ込み土である。また土層30~34)の上面は、地表に露出していた時間があつたものと思われる。



SP b - b')

調査区中央部を横断する土層堆積状況である。土層1～4)までは仮舗装工事に伴う堆積土である。土層3)は地下埋設電線の埋め戻し土である。土層5～8)はグリーンタフ片が含まれることから、福山城の築城あるいは福山館の修造に関わる土砂と考えられる。龍雲院あるいは光善寺の石垣のハツリ屑とも考えられなくも無いが、安政元年の「福山城見分図」によれば道路と城内の間に櫓列が廻らされており、櫓を越えて城内にハツリ屑を捨てたとは思われないので安政以降から取り壊し時までには堆積した可能性は少ない。もしそれら寺院のものだとすれば城取り壊しの明治8年以降が、築城以前の福山館期で、「松前奉行所経営地割図」に途中まで櫓列が描かれている。嘉永以前あるいは文化・文政期以前ということになる。土層12～25)はE P - 4の覆土である。土層12)の上面と下面にそれぞれ時期あるのかも知れない。いずれにしてもE P - 4の覆土を掘り返した後に土層12)が堆積したと思われる。土層26～36)は不明落ち込みの覆土で、おそらく江戸期と思われる。土層10. 11. 37～40)はH P - 1の覆土である。

SP c - c')

調査区中央部を横断する土層堆積状況である。土層2. 5. 6)は、築城時の盛土(埋め土)と思われる。土層12)を掘り込んだ覆土として土層9～11)が堆積している。E P - 1の覆土が、土層14～26)であり、上部が削平されている。この削平は土層12)の掘り込みと同時で、E P - 4の掘り込みに関係するのかもしれない。

SP d - d')

調査区東面の土層堆積状況である。土層2. 3)は、SP b - b')の土層5～8)と同様とも思われるが、明らかに土層4. 13)を掘り込んでいるので、築城時に掘削されて埋め戻された可能性が高い。土層13)以下は、E P - 5の覆土である。

SP e - e')

E P - 1の土層堆積状況である。何度も種類の違う土砂が投げ込まれている。この土層断面を見る限りでは、土層が水平に堆積していないので、雨水が溜まり冠水したことが無く、水理による影響を受けずに堆積していったことが判る。土層16)からは唐津二彩大鉢が出土するなど、17～18世紀代に掘削された可能性が考えられる。

SP f - f')

発掘調査区の北面の土層堆積状況である。土層4)までは江戸時代の福山城・福山館にかかわる盛り土と考えられる。地表面が削平されてからこれらの土砂が盛られたものと思われる。土層12～24)はP - 3の覆土である。掘り込み面は土層14)の上面と考えられる。土層10)の上位に火山灰の堆積が認められる。これらはH P - 1の覆土の窪みにも堆積していたもので、この土層断面に見る堆積状況からして土層28～30)の堆積するローム面が何らかの遺構であった可能性が考えられる。土層31)はH P - 1の覆土である。

SP g - g')

発掘調査区の南面の土層堆積状況である。基本層序と云えるものは無く、ほとんどが江戸時代の福山城・福山館にかかわり、削られたり盛られたりした土砂と考えられる。黒色土の自然堆積が認められないことから、ローム面まで掘削された後に、

これらの土砂が堆積したものと思われる。

・粘土採掘跡

過去の調査で、城内「本丸」地区から出土したこれに類する遺構を、「半地下様遺構」（久保1990）として報告したことがあった。しかし、今回、城外の「堀廻り」地区から、同様の遺構が出土し、精査した結果「粘土採掘跡」と判断するに至った。それは、不定形な平面形と断面形を呈す掘り込みで、床面も水平ではなく、踏み固められた様子も無い。当然、柱跡等の建造物を示すような痕跡も無い。壁面と床面は、いわゆる素掘りの状態で、鍬などによる掘削痕が残っている。また、覆土の堆積状況についても、多量の炭化物に少量の陶磁器片が混入する土層が何層も含まれるなど、いわゆる廃棄物・残土等の捨て場的な状況を示している。そして出土遺物から年代もある程度想定され、城の火災による修造時期と新城築城時期などが考えられる。したがって、このような遺構については、壁土などに用いる粘土の採掘と、その採掘跡を残土等の処理場として利用するという、二つの目的があったものと思われる。

また、近年調査している東山遺跡（朝日登岡線）でも、同様の遺構が発見されている。この台地は、近世には家臣の屋敷地であった地域で、当時、半農半士であったため一つの地割りが広大で、自家新築・改修に必要な粘土を、自家の敷地内から採掘したようである。このように、城内ばかりではなく、家臣の屋敷地でも同様の遺構が発見されている。

なお、当然家臣の屋敷地内には、いわゆるムロとして利用されたと思われる、方形の掘り込みで柱穴を有する遺構も同時に発見されている。これらの遺構の構築時期は不明であるが、廃棄時期はおしなべて幕末・明治であると出土遺物から考えられる。

以下に各遺構の土層堆積状況を述べる。

EP-1

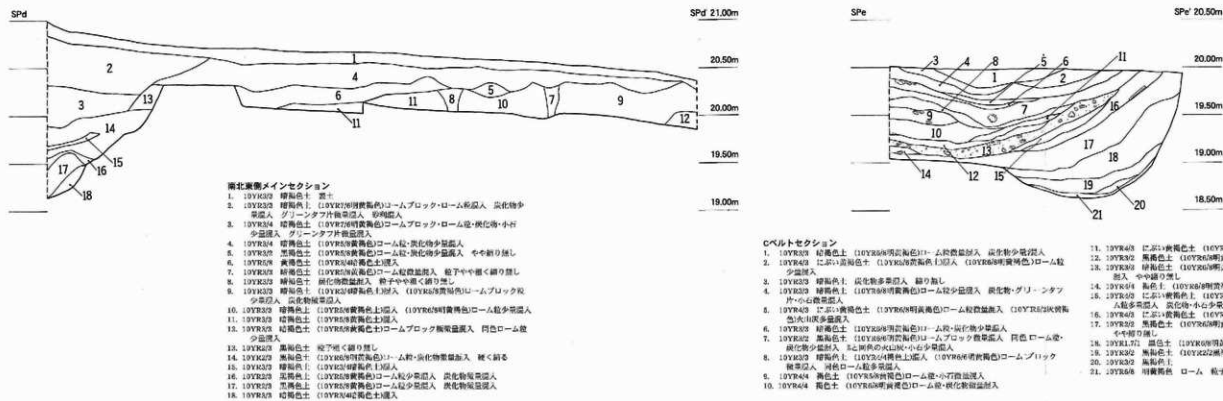
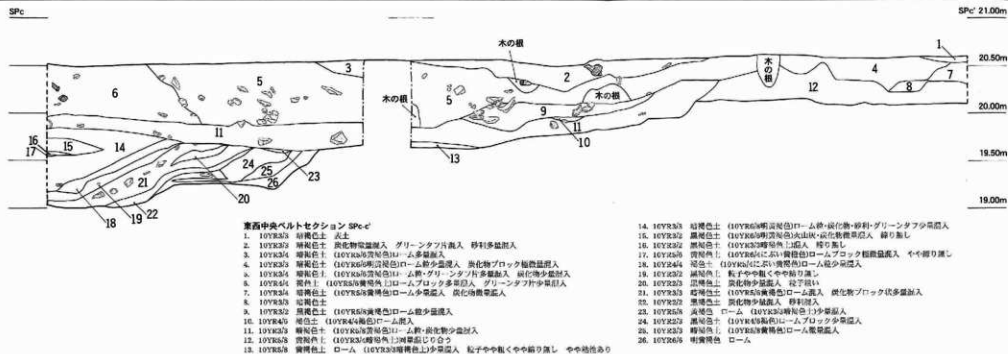
調査区の南西部に発見された。EP-2.3より新しい。いくつかの窪みが認められるが、土層断面から一回の掘削でこのような平面形になり、少しずつ埋めもどされていった事が判る。また、SP e-e'の土層4）までは嘉永2年から安政元年までの新城築城時の堆積土である可能性が高く、また、それより下位の堆積土は、築城以前、17～18世紀代の可能性が高いことが、出土した陶磁器から考えられる。

EP-2

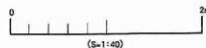
EP-1の南側に発見され、EP-1よりも古い。現状ではローム面から浅い掘削に見えるが、当時のローム上面は、現在見る地表面よりも高かったものと思われる。

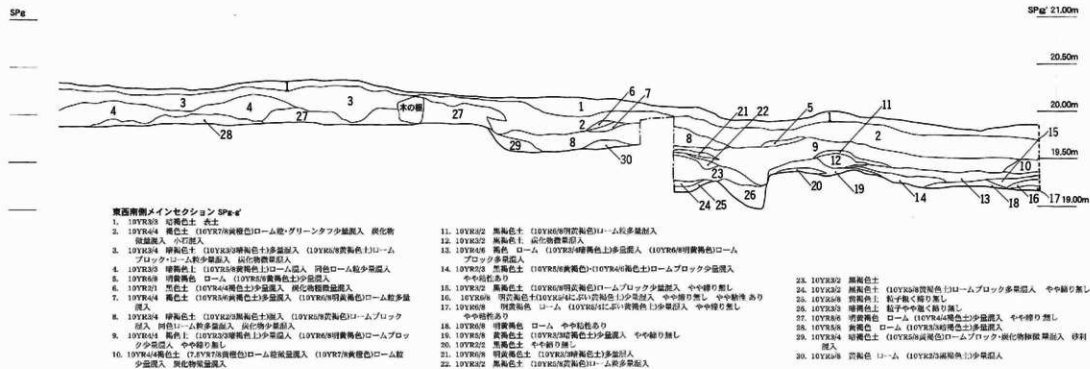
EP-3

EP-1の北側に発見され、EP-1.4よりも古い。不定形ながらも円形に近いプランで東壁にロームを削り出して作られた階段が3段認められる。また、階段の



第5図 調査区土層断面図(2)





上部はEP-4に切られている。

EP-4

EP-1より新しい。土層堆積状況を見ると、EP-4とその北側の掘削跡が同時に埋め戻されている状況が観察される。このことは、EP-4を含めたこの一帯が、一定の期間、粘土採掘場として、ロームの窪み面が露出した状態にあったことを示している。

EP-5

EP-4との関係は土層断面が無いので判然としないが、同時期か、EP-5の方が新しいのかもしれない。

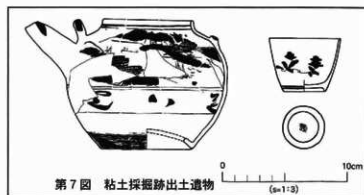
EP-6

EP-3より古いと思われるが、土層断面が無いので良くわからない。

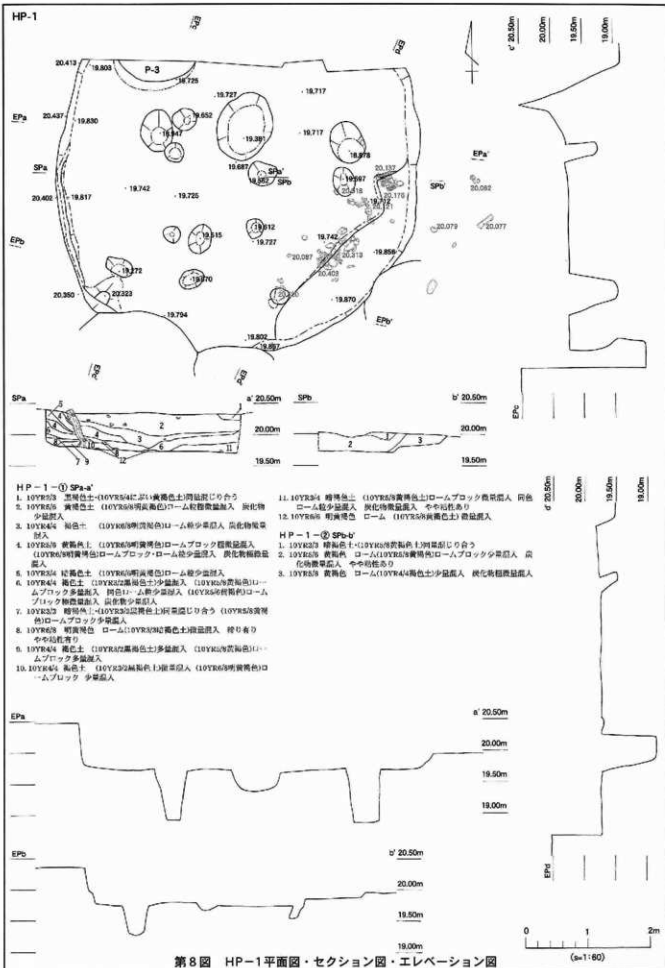
・粘土採掘跡出土遺物

粘土採掘跡から出土した陶磁器類は、17世紀後半から幕末までと年代の幅が広い。また、同じ採掘跡でも覆土の上層と下層では年代が異なる。何度も掘り返したり埋め戻したりした痕跡が認められるため、年代を決定付ける事が難しい。可能な限り出土遺物の取り上げには注意したが、その範囲から云えるとすれば下限が17世紀後半で、上限が幕末の新城築城時ということになろう。図示した遺物は、1)は土瓶で、断面は比較的肉厚である。2)は「渦福」模様が高台内に描かれた蕎麦猪口で、18世紀代の肥前産と思われる。

また、包含層も含めて出土した陶磁器類の総点数は842点であった。



第7図 粘土採掘跡出土遺物



2) 縄文時代

K.W. 縄文時代後期前葉住居跡、大型礫、フラスコ状土壙

抄録

住居跡は、全体の約2/3程を調査した。中央に浅い窪みがあり、大型の礫が積み重なるように堆積していた。床面近くから前期末と後期前葉の土器が出土した。P-3 フラスコ状土壙はこの住居址の覆土を掘り込んで構築されている。

・住居跡（第8図）

HP-1

本遺構は北側が、仮舗装道路町道寺町線の下位になり、全体の約2/3程を発掘調査した。

遺構の確認は、遺物包含層を掘削中に暗褐色土上面の窪みに灰褐色火山灰層が発見されたことによる。プランの確認は、西側のローム層上面でこの住居跡の西壁のみを確認した。この部位でのローム層上面から床面までの深さは0.6mを測る。南壁と東壁はこの時点では確認されず、住居跡の床面を追って確認されることになった。その結果、南壁は江戸中期の粘土採掘によって切られ、東壁は、この住居跡の廃棄後になんらかの遺構の構築のため、広範囲に掘り込まれたものと思われるが判然としない。しかし、その不明遺構の覆土の下位から僅かに床面からの立ち上がりを確認した。

住居跡のプランは、隅丸の長円形と思われる。床面の規模は、地床炉を通る短軸が約5.3mである。床面の長軸はほぼ南北方向を指す。西側の壁際に、壁面に沿って僅かな窪みがあり、また、南東側には、比高差が15cm程、奥行きが0.7mのベンチ状の張り出しがある。

床面は、壁際を除いて硬く締まっている。中央にやや窪ませた地床炉があり、大型の円礫や石皿が積み重なるように堆積していた。

この住居が構築された時期は、床面近くから出土した遺物から、後期前葉の可能性が高い。

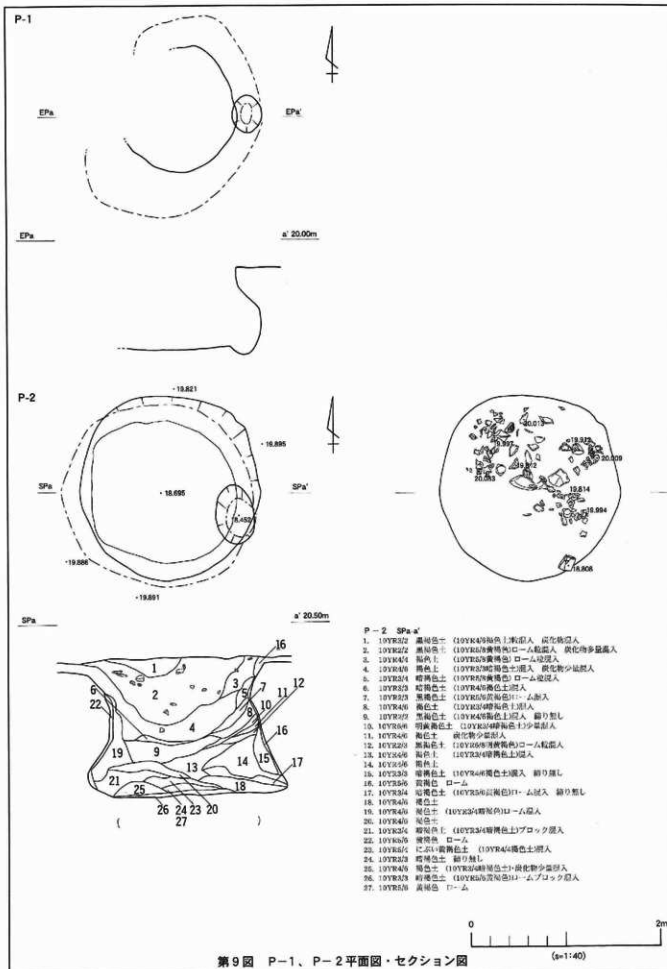
・出土遺物

住居跡内から出土した遺物は合計491点で、その内訳は土器が392点、石器が4点、礫石器が29点、薄片が7点、礫が59点であった。出土遺物の主な時期は、縄文時代前期末葉と後期前葉の2時期が考えられる。

土器

復元土器（第11図1, 2）

復元可能となった土器は二個体である。1) は、やや肥厚する口縁文様帯に2本一組の縄線文が三条施され、外反する口唇部には同じく燃糸の圧痕が縦位に施される。胴部には合摺が施文される。内面調整は、口縁部が横方向で胴部が縦方向のナデである。焼成は良好で、胎土破面に繊維と思われる空隙が認められる。縄文時代



前期円筒下層d 2式と思われる。2)は深鉢型土器で口唇部断面形が角型に近い。口縁部は無文で頸部から大きく張り出した胴部全体にかけて、RLの地文に沈線文が描かれる。2本一単位とした波型文を主体とし、その間に渦巻き文を描く。縄文時代後期前葉と思われる。床面から少し浮いた状態でまとまって出土した。

拓影土器 (第12図10~14)

拓影で図示したものは5点で、10、11)は縄文時代前期円筒下層d 2式と思われる。12)は折り返し口縁でRLの地文が施される。口唇は角型に近い。焼成は良好で表裏面とも赤褐色を呈す。13)はRLの地文に角型口唇である。二次焼成を受けたと思われる、破面が灰白色を呈する。14)は薄手の小型土器で口唇は角型に近い。いずれも後期前葉と思われる。

石器 (第16~23図)

11)は蛇紋岩製の有穴石器である。用途は不明であるが端部に剥離痕がある。17)は側縁の一部が欠損した北海道式石冠である。スリ面の広いのが特徴的である。安山岩製である。26)はスリ石で砂岩製である。30)は緑色凝灰岩製で、二側縁にスリ痕がある。31)は一側縁にスリ痕がある。砂岩製である。33)は石錘の未製品で、加工途中に一側縁が剥落してしまったものと思われる。砂岩製である。

次に、住居跡中央部の窪みから積み重ねるように出土した礫石器を述べる。41~45)は、円形の窪みを残す石皿である。球形又は卵型のスリ道具を石皿面で水平方向に回転させながら転がすことによって出来たと思われるほど、きれいな円形の窪みである。46、47)は溝状の窪みが残る石皿である。スリ方向が明確なものもある。48)は前述した円形の窪みを残す石皿に使われたスリ道具と思われる。なお、この住居跡中央部の窪みからは、これら礫石器のほかにも礫も多量に出土した。

・土壌

P-1

調査区のほぼ中央部から発見された。遺構の上部は江戸期の粘土探堀で破壊され、土壌底部のみが確認された。底面の最大径は2.2mを測る。底面東側の壁際に径が0.4m程の浅い窪みがあり、著しくオーバーハングする壁面が特徴的である。

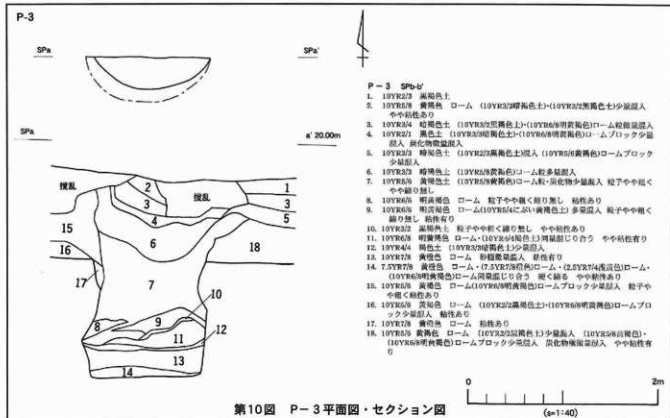
出土遺物は118点出土し、内訳は土器83点、礫石器14点、礫18点、その他2点である。

土器：第12図15、16)を図示し、どちらも縄文中期前半で、それぞれ円筒上層cとd式と思われる。

石器：スリ石を2点図示した。第18図23、25)で、どちらもスリ石である。23)は緑色凝灰岩製で、石錘の転用と思われる。また、一側縁に敲打による凹みが見られる。25)はその断面形から石ノコのようにも思える。頁岩製である。

P-2

調査区の南東部で発見された。遺構確認面は漸移層である黄褐色土上面である。断面形は緩いオーバーハングを呈し、底面の最大径は2.5mを測る。確認面からの深さは2.9mで、底面はほぼフラット。底面東側の壁際に、平面形の規模が1.2×0.8



mの楕円形で、深さが0.2m程の浅い窪みがある。土層の堆積状況は、1.2)層が遺物を大量に包含していた黒褐色土で、それ以下がロームを含んだ褐色系の明るい色調となる。

出土遺物は、土器76点、石器3点、礫石器9点、薄片16点、礫13点、その他2点である。また、底面に土器胴部が1個体出土した。

土器：第11図3～9)は復元が可能となったものを図示した。3)は床面出土で、この胴部から底部にかけての一個体が床面にやや立ち上がりぎみの状態で横たわっていた。内外面とも炭化物の付着が顕著である。4、5)は口唇部に縄線文が施された土器で4)は三条で5)は一条である。縄線文は、胴部地文の原体を使用したものと思われる。どちらも焼成は良好で、器内外面とも赤褐色を呈する。7～9)は、口唇部が角型もしくは角型に近い形状で、端部をへうでなでているものである。6)は底部付近に炭化物が付着し、7)は全体に吸炭し黒ずんでいる。8、9)については、焼成が良好で内外面とも赤褐色を呈する。いずれも縄文時代後期前葉と思われる。

拓影土器 (第12～14図)

17～21)は竹管状工具による刺突文を主として文様を構成するものをまとめた。17～19)は同一個体と思われるものである。17)はやや外反した口縁で、口唇は水平にナズられ、頂部を指の腹でやや窪ませた二対の突起がある。その下位に、細い粘土紐を縦に2本貼り付け、粘土紐の上部を竹管状の工具で器面に対して下方から斜めに施文し、その上部の粘土紐の間には、粘土を指で引き下ろした小突起をつける。口唇から頸部にかけては、器面に対し右斜め方向からの竹管状工具による刺突文が、上下に三条づつ廻る。なお、突起のある口縁に直交する部位の口縁には突

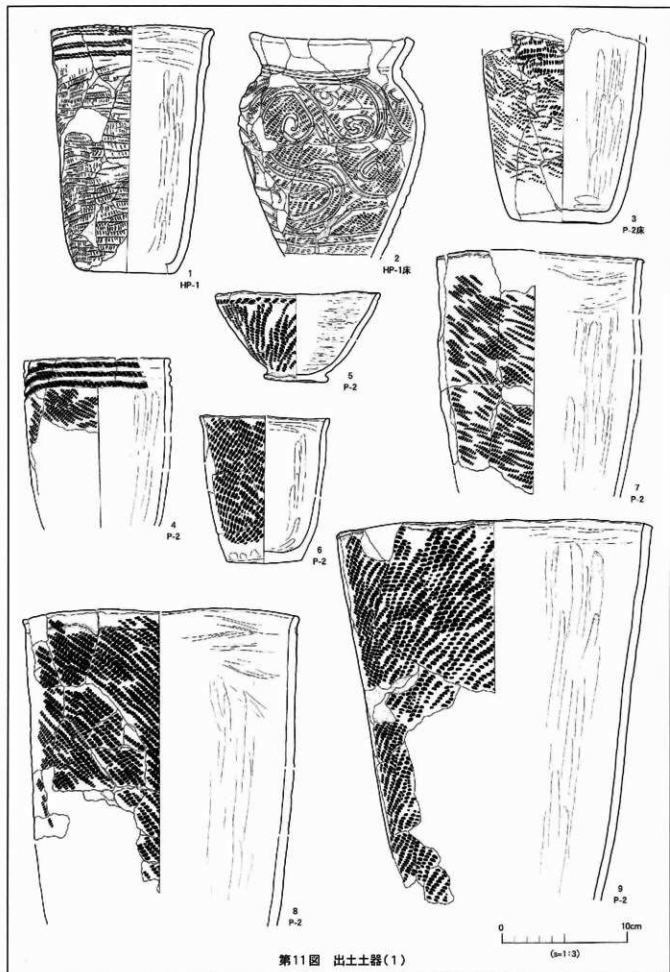
起が無く、二対の指による窪みが口唇に認められる。そして、この下位には前述の小突起は無く、同様の刺突文が施された粘土紐がコの字に廻る。18) は口唇からくの字にくびれた頸部から大きくふくらむ胴部にかけての破片である。口唇から垂下した二本の貼付帯は側面に分かれる。その分かれた部位に指の腹で丸い窪みが施される。頸部を少し下ったところで、二本の貼付帯が口縁の文様帯と胴部地文とを画す。胴部とを画す二本の貼付帯に施された刺突文は、右側から斜め方向に付されている。胴部の地文は複節LRRと思われる。19) の底部は平底である。これら3点の内面は横もしくは斜め方向に調整痕があり、胎土は砂粒を多く含んでいる。焼成は、内面は赤褐色の部分が多い。外面は吸炭し褐色を呈しているが炭化物の付着は認められない。20) はかなり巨大な甕型土器の口縁部である。二次焼成を受けたと思われる破面が灰色を呈す。口唇断面形はやや角型を呈し、頂部が水平にナデられている。口縁の文様は口唇付近に右からの竹管状工具による刺突列があり、沈線をはさんでその下位にもう一条の刺突列がある。さらにその下位に、無文帯の側面に刺突列を施した弧状の文様が付される。18) は小型の鉢形土器で、折り返し気味の断面形が角型の口唇に、地文と同じ縄文LRが付される。口縁から胴部の肩にかけて文様帯があり、竹管状工具で器面に対し垂直に施した円形の刺突文が上下に二条廻り、その間に縄線文が一条廻る。器外面は吸炭し、また、炭化物の付着も認められる。口唇縄文、縄線文、地文とも同一原体と思われる。

22~31) は縄線文を主として文様を構成するものをまとめた。

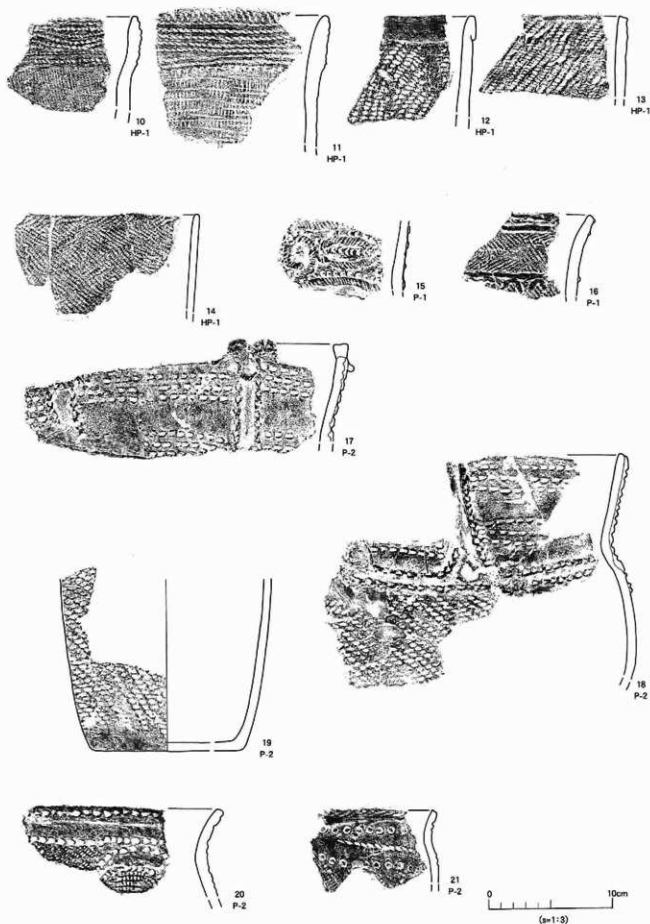
22, 23, 26, 28) は縄線文のみで、明確な無文帯の無いものである。22) は、口唇がいびつな小型の鉢と思われる。二次焼成を受けたと思われる破面が灰色を呈する。二条の縄線文が口縁を廻る。LRの原体で胴部も施文する。23) は胴部が大きくふくらむ小型の甕である。二条の縄線文の間が26, 28) と同様にやや広い。良く吸炭し内外面とも炭化物が付着する。口唇が水平にナデられる。26) は深鉢で、口唇の断面形が角型を呈し、頂部を水平にミガク。四条廻る縄線文はすべてLRの原体で胴部も同じである。28) は口縁が開く小型の鉢である。口唇を斜めにナデているので、断面形が尖って見える。全体に吸炭しているが内面は炭化物の付着が著しく黒光りするほどで、口縁の外面には吹きこぼれと思われる炭化物の付着が認められる。

24, 25, 27) は、縄線文の間に幅広い無文帯をもつものである。24) は、小型の鉢で、内外面とも良く吸炭し、内面は炭化物が黒光りする。LRの原体で縄線文、地文とも同様である。口唇断面形は丸型に近く、よくミガかれている。25) は、胴部がふくらむ小型の甕である。二条一単位とする縄線文が施され、口唇断面形は丸くミガかれている。よく吸炭し内外面とも炭化物が付着する。27) は深鉢で、口唇の断面形は角型を呈し、頂部が水平にミガかれている。縄線文、地文ともRLの原体である。焼成は良好で部分的にやや吸炭しているものの全体としては赤褐色を呈し、破面も同色である。

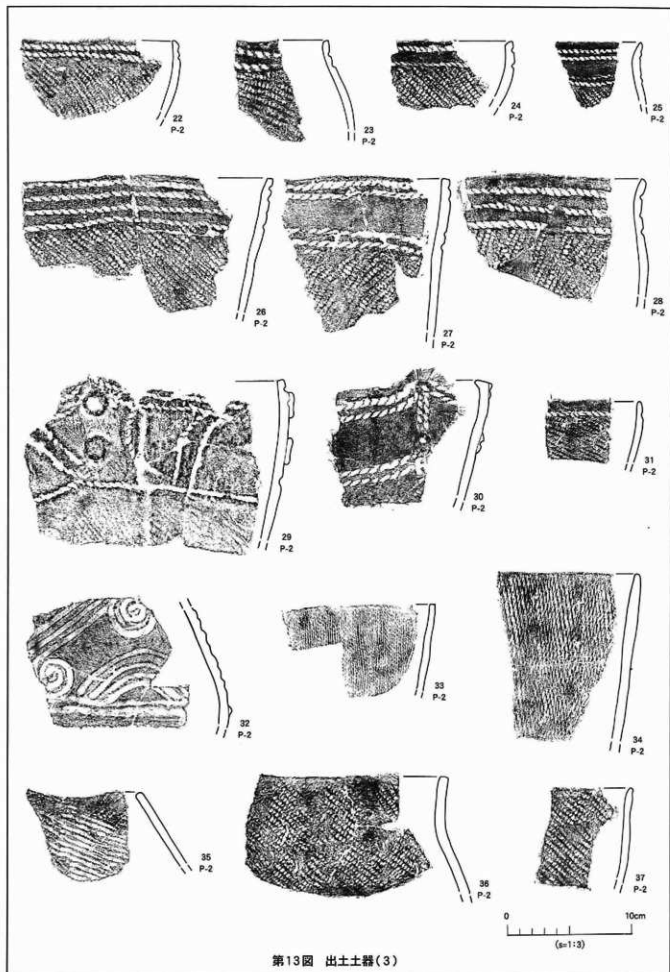
29, 30) は、縦位の縄線文とボタン状の貼付文をもつものである。29) は、波状口縁をもつ深鉢で、口唇断面形は角型を呈す。山形の口唇部下位に二つのボタン状貼付文が縦位に付される。口唇近くに二条の縄線文が廻り、胴部地文を画すようにして廻る一条の縄線文との間に、弧を描く縦位の縄線文がランダムに配される。二条



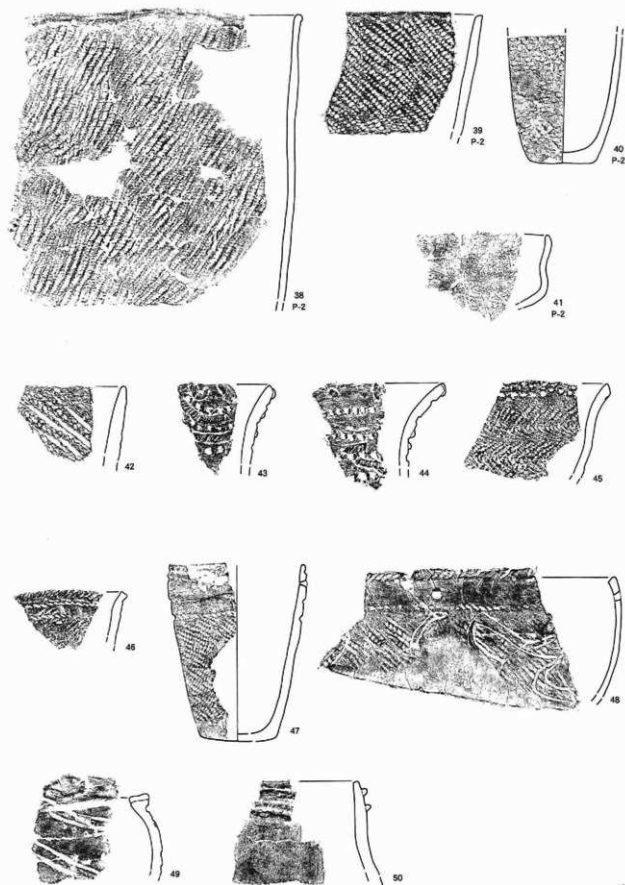
第11図 出土土器(1)



第12図 出土土器(2)

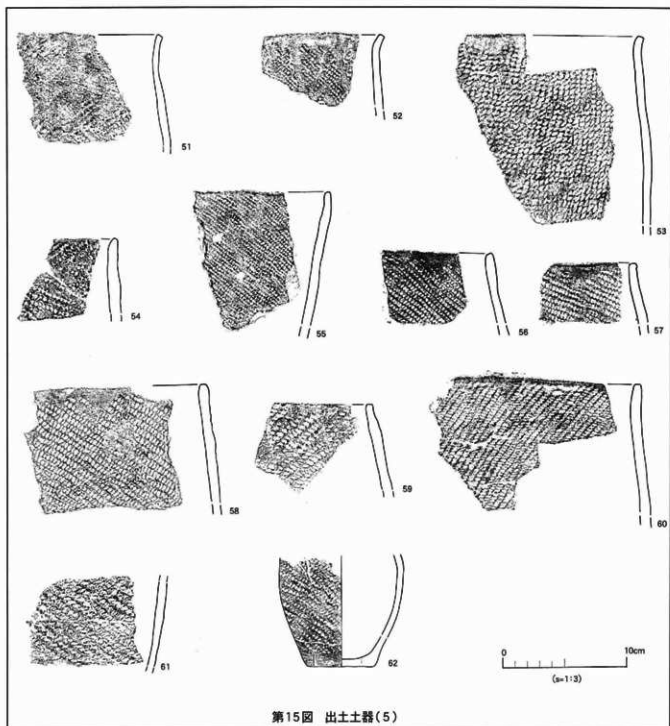


第13圖 出土土器(3)



0 10cm
($\frac{1}{3}$)

第14図 出土土器(4)



第15図 出土土器(5)

一単位と一条一単位があり、一条のほうが弧のアールが強い。胎土に砂粒が多く含まれ、器面全体がザラザラした感じである。縄線文の原体はL Rであるが、胴部地文にはR Lもある。30) は、口縁に山形の突起をもつ深鉢で、口唇断面形は角型を呈す。山形の突起は頂部を内側に肥厚させ、外面には小さなボタン状突起が付される。その突起には縄の結束部を押し付けたような痕跡がある。その突起から垂下する二条の縄線文の下位にも同様の突起が付される。縄線文はR Lであるが、胴部地文は不明である。焼成は良好で外面がやや吸炭する。

31) は、縄線文と沈線文が施されている小型の鉢である。口縁は波状で、口唇断面形は丸い。縄線文および胴部地文の原体は無節のLである。弧状を呈する沈線は、たとえば薄片のようなカミソリ状の、かなり鋭利なもので描かれたと思われる。焼

成は良好で外面は吸炭し、内面は炭化物の付着が目立つ。

32) は、沈線と隆帯で文様を構成するもので、壺型土器の胴部上半である。三条一単位の沈線と、渦巻き文を施文する。焼成は良好で破面も赤褐色を呈す。

33,34) は、口唇断面形が角型を呈する燃糸文の鉢である。良く吸炭し、33) は内外面とも炭化物が付着する。

35～39) は、地文のみのグループである。

35) は、口唇が水平にナデられた甕である。焼成は良好で赤褐色を呈す。36) は、口唇に縄文が施文された甕である。37) は、内外面とも炭化物が付着した鉢である。38) は、口唇が水平にナデられ、折り返し口縁気味の深鉢である。焼成は良好で内面は赤褐色、外面はやや吸炭する。39) も、38) 同様の口縁で、深鉢である。内外面ともやや吸炭する。40) は、上部が欠損したものであるが、その破面を観察するときれいにナデられた口唇が認められる。したがって、コップ状の小型の鉢を作成している途中で、さらに大きな鉢に作り変えて焼成したものの、上部が焼成中か使用中に欠損し、その上部が欠損した状態でまた使用したものと思われる。なぜならば、口唇と思われる部位に付着した炭化物が黒光りしているからである。また、その破面も他の破面と比較し摩滅した状態である。胎土は吸炭し、内外面とも炭化物が付着し、特に内面は炭化物が黒光りしている。

41) は、無文の浅鉢である。胎土は砂粒が多く、器面はザラザラしている。赤色顔料が内外面に塗布されている。

石器：第16図10) は、片面加工の薄片石器である。刃部が縦長薄片の両側縁に作られている。第17図16, 20) は、礫石器である。16) は安山岩製の北海道式石冠で、ほぼ完全な形状である。20) は楕円形の礫の長軸にそって敲打が鉢巻状に一巡し、それに直交する一側縁に摩滅した使用面と思われる水平な面が残されている。安山岩製である。

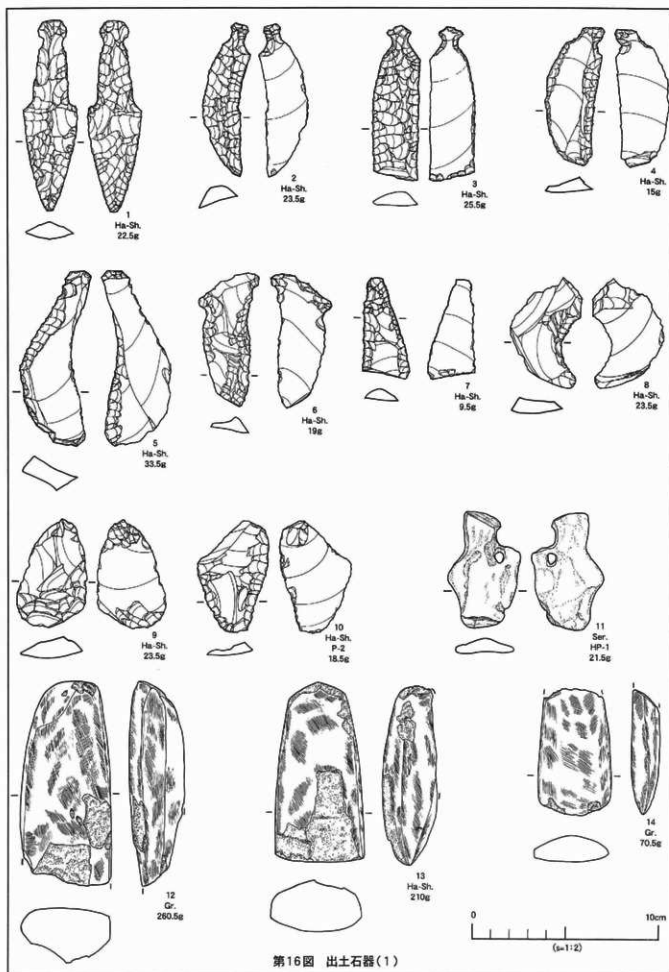
P-3

調査区北側の道路際に発見され、H-1の床面を掘り込み構築されていた。掘り込み面はH-1の覆土上面と思われる。断面形は緩いオーバーハングを呈し確認できた底面の最大径は1.2mで、掘り込み面からの深さは1.7～2.0mを測る。底面はほぼフラットであり、硬質でボソボソした感じのロームである。出土遺物は土器が46点であった。

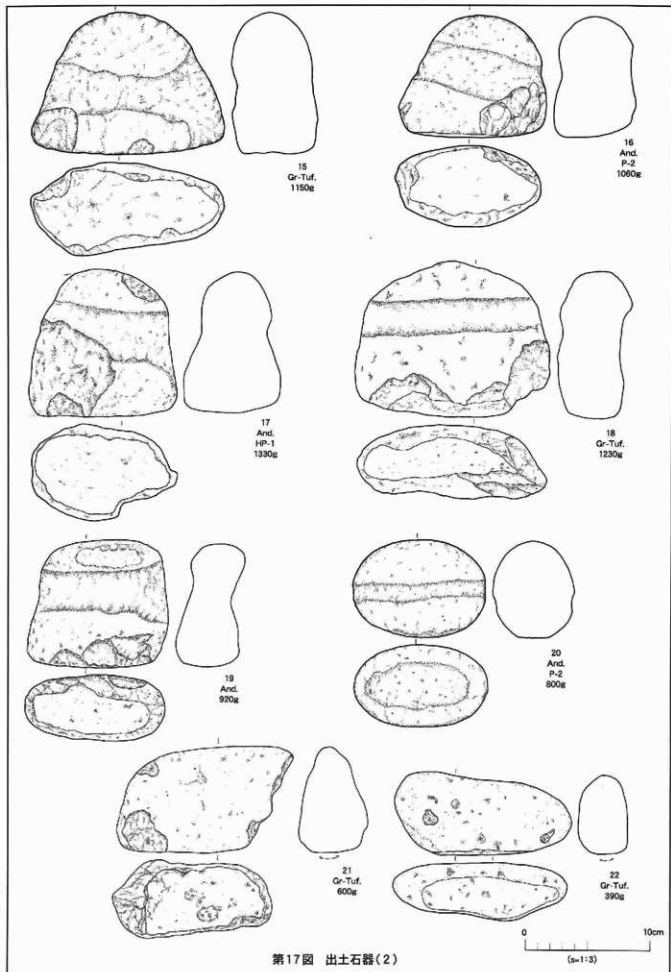
・遺構外出土遺物

土器：遺構外から出土した土器の総点数は1,689点であった。年代は、縄文時代前期後半から後期前葉にかけてで、後期が主体である。出土点数が少ないことと、遺構出土の一括遺物があるので、詳別にはせず、個々に述べることにする。

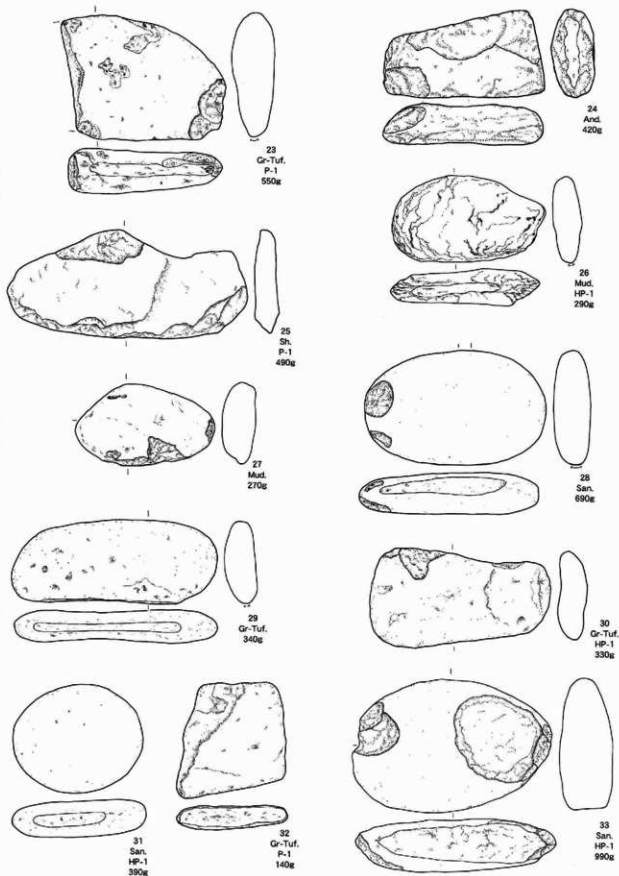
縄文時代前期後半：42) は合い燃りの深鉢口縁である。円筒下層式と思われる。遺構出土のものとしては、HP-1から円筒下層d2式が出土している。



第16図 出土石器(1)

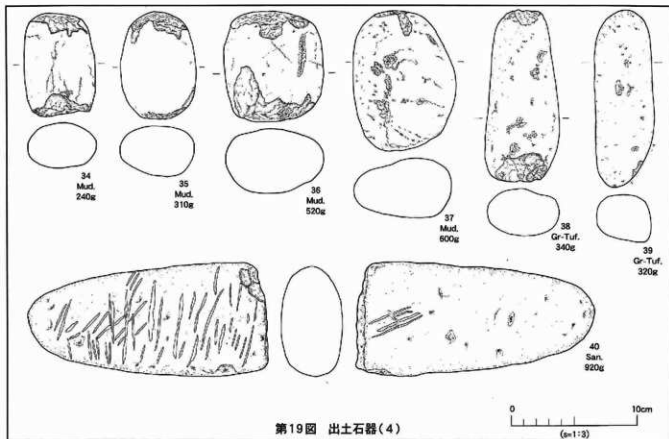


第17図 出土石器(2)



0 10cm
($\times 1/3$)

第18図 出土石器(3)

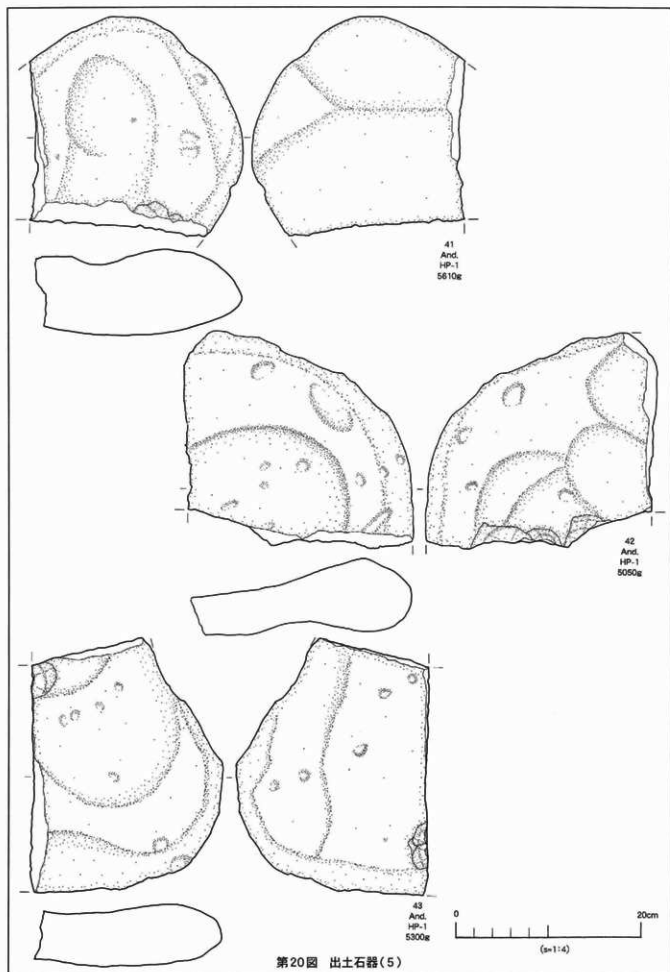


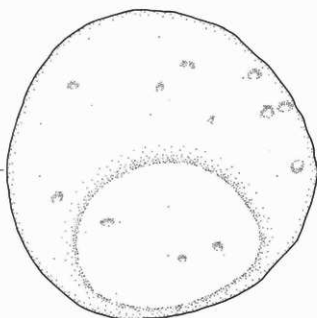
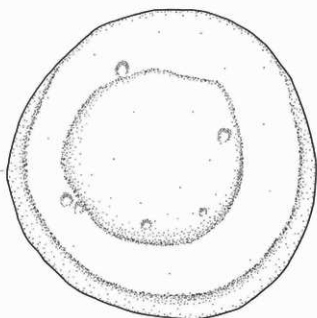
第19図 出土石器(4)

縄文時代中期前半：43, 41) は、口縁が大きく外反し、口唇断面形が山形を呈する深鉢である。口縁部には、弧を描く襷糸文を施された貼付粘土紐の間に刺突文を施す。口唇も同様の粘土紐を貼り付けている。円筒上層c式と思われる。45) は、口唇断面形が山形を呈する小型の鉢で、口唇部に縄の結束部が押圧されている。

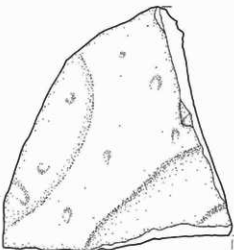
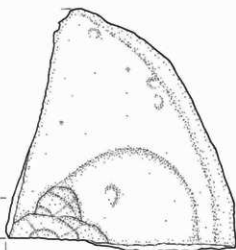
縄文時代中期末から後期前葉：46) は口唇断面形が角型を呈し、口縁内側に指頭による押圧が並ぶ。縄線文、口唇の施文、胴部の施文と同じL.Rの原体を使用している。二次焼成を受けており、破面を含め全体が灰褐色を呈す。47) は口唇がナデられ、口唇断面形が角型を呈する小型の鉢である。口唇付近に二条の縄線文を施し、無文帯を介して一条、さらに無文帯を介してもう一条施文される。縄線文地文ともL.Rの同一原体である。器面全体に吸炭し、内外面とも炭化物が付着し、特に内面が著しい。48) は、口唇が肥厚し縄文が施文された鉢である。口縁の擦消帯には縄線文の痕跡があり、擦消帯の下部に縄線文が廻る。擦消帯には小穴が穿たれている。胴部地文には2本一単位で沈線文が描かれる。49) は、玉縁状の口唇をもつ浅鉢で、口唇に指頭で押し付けた突起がある。胴部は2本一単位の沈線が引かれ、その下位に竹管状工具による斜め右からの刺突文が施される。50) は、口唇断面形が角型に近く口縁部に二条の粘土紐が貼り付けられている。48～50) はともに焼成が良好で胎土も良く似ている。

51～62) は地文のみのものである。51) は口縁がやや外反する小型の甕で、口唇はナデられている。表裏とも良く吸炭し外面に炭化物の付着が著しい。52, 53) とも、口縁がやや外反し、口唇は水平にナデられている甕である。どちらも焼成は良好である。なお、52) は部分的に二次焼成を受け、破面とも灰色化している。54, 55) とも口唇がわずかにナデられる深鉢である。55) は内外面とも良く吸炭し、外面口縁部と内面全体に炭化物が付着している。56～61) は口唇が水平にナデられ、

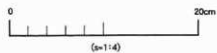




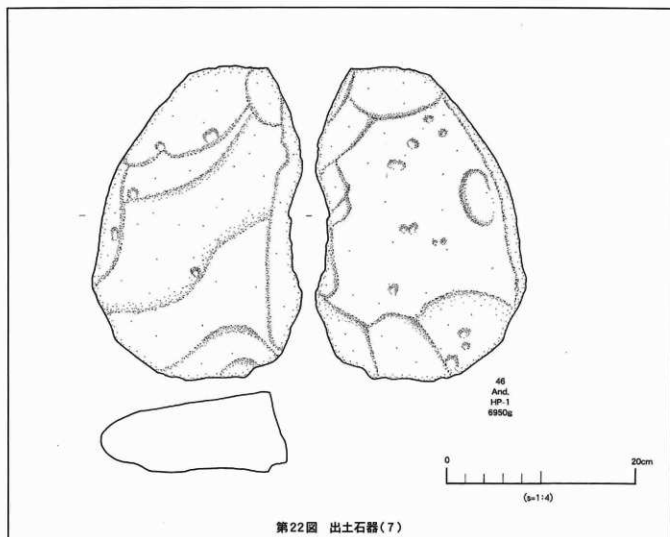
44
And.
HP-1
16000g



45
And.
HP-1
5450g



第21図 出土石器(6)



第22図 出土石器(7)

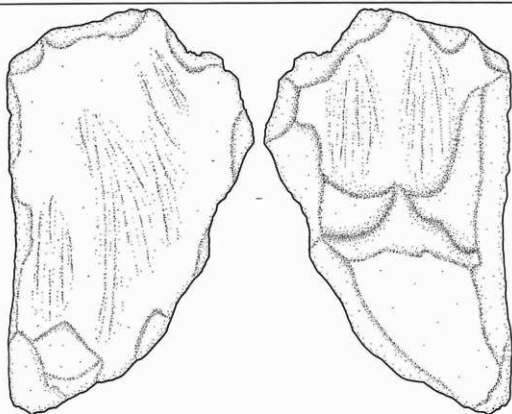
その断面形が角型を呈する甕である。57) は折り返し気味の口唇外面が玉縁になっている。58) は内外面とも吸炭し口縁内側に炭化物が付着する。59) の口唇断面は、切り取ったようなシャープな角型を呈する。60) は胴部外面に炭化物の付着が認められる。61) は胴部破片で外面に炭化物の付着が認められる。62) は小型の甕で、良く吸炭し、内外面とも炭化物の付着が認められる。

石器：第16～19図

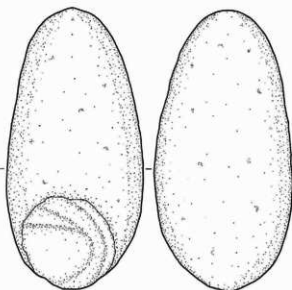
薄片石器 1) は両面加工の定形石器である。全体の形状は石鋸であるが、柄の端部の両側縁からノッチを施す。2～4) は、つまみ付きナイフである。縦長薄片の片面を調整し刃部をその両側縁に作る。つまみ部を作り出すための両側縁のノッチが明確なものである。3) の下端はスクレイパー的な機能も果たしていると思われる。5～10) はスクレイパーとした。上記はすべて硬質頁岩製である。

石斧 12, 13) は、両刃の石斧である。12) は、緑色岩製で基部は礫皮面である。13) は硬質頁岩製で、基部から刃部方向に、放射状に剥離面が認められる。その基部には敲打による摩滅痕が認められることから、刃部の損傷した石斧を敲打器として再利用した可能性が考えられる。14) は片刃の石斧である。基部の折れ方から、手斧のような使われ方をしたものである。

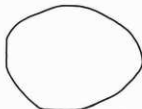
礫石器 15～19) は北海道式石冠で、ほとんど全てが下端の擦り面の端部から上



47
Mud.
HP-1
18000g



48
And.
HP-1
6700g



第23図 出土石器(8)

方に向かって剥落していることから、擦る以外に、この面で敲く事も行われていたと考えられる。

21～29) はスリ石である。21, 22) は擦り面の幅が広いもので、北海道式石冠などと同様の使われ方がされたものと思われる。23～29) は擦り面の幅が狭いもので、23～26) は、側縁の加工により直線的な擦り面あるいは敲打面を作り出しているものである。23) はその側縁に、尖頭状工具の敲打による窪みが認められる。27～29) 自然石の一部に擦り面が残っているものである。23, 29) は緑色凝灰岩製である。

34～38) はタタキ石である。特に33～37) はその器形に特徴があり、短めの長円礫の両端をかなり敲打している。手持ちハンマーのような使われ方をしたものと思われる。38) は長めの長円礫を使用したタタキ石である。

39) はスリ石で、先端部の一側縁が擦られている。それほど硬くない少量のものを掘り潰すのに使われたのであろう。

40) は、砂岩製で、一端が欠落している。表面が滑らかなところもあれば、敲打によると思われる荒れたところもある。扁平な側縁に、幅が狭く断面形がV字状の溝が、礫の長軸と直角方向に幾筋も認められる。長さは一様ではなく、方向も微妙に異なっている。用途不明の石器あるいは石製品である。

Ⅲ まとめ

・近世遺構

これまでの、福山城内の調査で、今回「粘土探掘跡」としたものに類する遺構が発見されているので、この項では過去の調査例について述べたいと思う。それは、本丸の調査で発見され、「半地下様遺構」として報告されている（「史跡福山城Ⅶ」1990.3 PP34～47）。その平面形は長方形で、不安定な床面で素掘りの状態であったと報告している。しかし、同書のP81上段の写真をみると、直線的な壁を持つ長方形の遺構の壁面に、不定形の壁面を持つ遺構（粘土探掘跡）の覆土断面が見えていることから、両者は時期が異なり、少なくとも二度にわたり掘削されたと考えられる。さらに、P38の Spa-a' の土層断面図を見る限りでは、段差のある平坦な床面に時間差は無い。この様に、直線的な壁を持つ長方形の遺構についてはその性格が分からない。ただ、構築年代については、本丸土居石垣の根石がこの直線的な壁を持つ方形の遺構の覆土上部に構築されていることから、長方形の遺構は新城築城以前であることが判る。また、不定形の壁面を持つ粘土探掘跡については、長方形の遺構により切られていることから、これよりも古い事は判るが、時間差については不明である。さらに、長方形の遺構の中央部に残された階段のようなスロープ状の部位を通り、床面にコの字状に残る杭列は、「導場」の布基礎石の沈下を防ぐための杭であると思われる。こうした杭を打ち基礎の沈下を防ぐ方法は、「土蔵」の土台石垣下や、「追手門」の構台石垣下で発見されていて、どちらも、地盤が軟弱な箇所である。したがって、長方形の遺構が埋め戻された直後に「導場」が構築されたのかも知れない。しかし、同じく長方形の遺構の覆土に構築された、本丸土居石垣の根石下に杭跡が発見されたという報告がないので、矛盾が無いとも云えない。

長方形の遺構の覆土から出土した遺物については、出土位置が不明であるが、最も新しいものは19世紀前半の肥前窯の端反碗で、最も古いものは15世紀後半から16世紀前半の青磁綾花皿であると報告している。出土遺物から見たこの遺構の構築時期は幕末とも思えるが、出土位置がわからないので、年代を特定できない。直線的な壁を持つ長方形の遺構と、不定形の壁面を持つ遺構とでは時期が異なり、後者の方が古い。また、城の本丸にこのような大きな掘りこみが、埋め戻されずに地表からわかる状態が残されたとは思われない。したがって、掘削してすぐに炭化物や陶磁器片の混ざった土砂で埋め戻されたものと思われる。そのように、緊急性を帯びた状態、すなわち火災などによる城の修造であったり、新城築城時であっても、木屑や端材などはその場で焼かれ、ここに廃棄されたものと思われる。

以上のように、形態の差こそあれこれらの遺構は、その掘り上がった形が重要なのではなく、粘土が必要で掘削した結果そのような形になったのであろう。そして直ちにその穴を腐材・残土の捨て場として利用したものであると考えられる。

・縄文時代

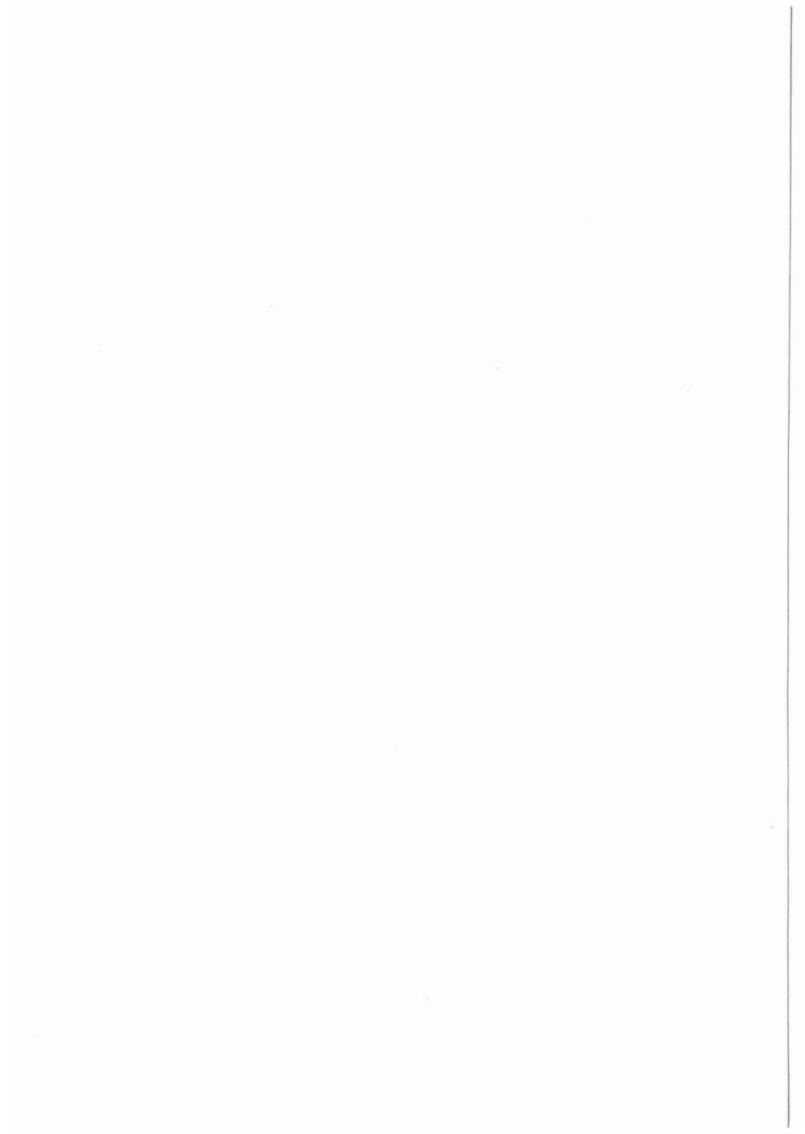
松城遺跡の発掘調査は、過去2回調査された。そのうち、平成2年度の調査（久保1991.3）では、法幢寺の東側を260㎡を調査した。その結果、住居跡10基、焼土跡10箇所、土竈1基の遺構を発見し、出土遺物は土器が79.011点出土したと記されて

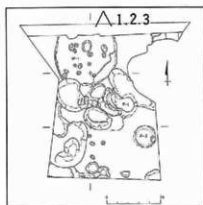
いるが石器の出土点数は不明である。また、盛り土遺構が発見されたような記述があるが具体的な図を示していない。さらに、層位毎に遺物を取り上げたところがあるが、その層位が、図示されている土層断面図のどの位置に対応するのか記されていない。要するに、なにをどの程度の精度で調査したのか全くわからない。そして、出土土器は円筒下層Ⅱ式が主体であると述べているがその根拠がわからない。次に、平成3年度の調査（久保1992.3）では、今回の調査地の西側に隣接する、光善寺山門の南側道路部分161.3㎡の調査を行っている。その結果、住居跡3基と土壇1基を発見したとし、出土遺物は土器が2,710点で、石器の出土点数は不明である。出土土器は縄文時代後期前葉の縄線文と沈線文などがある。

以上のように、福山台地が部分的に調査されてきた結果、松城遺跡は縄文時代のかなり大規模な集落跡と判明した。ただ、寺町の境内地はその寺院の建立の際、本堂のある山側は地山面まで水平に削られていることが現況から判明するので、この部分については消滅している可能性がある。しかし、本堂以外の境内地や、寺と寺の境界に設けられた土塁の下などに縄文時代の遺構遺物が埋蔵されていることは云うまでも無い。平成2年度の調査地は、法源寺の本堂が石垣を廻らせた盛り土上に建立されたため保存されたのであった。そして、今回の調査地も、福山館・城の土塁によって守られてきたと云える。また、標高20m付近から縄文時代後期の遺跡があり、それより上位の標高40mを超えるあたりまで縄文時代中期・前期の遺跡があるという傾向は、現在も調査を行っている東山遺跡の出土傾向と一致する。さらに、町内各地の遺跡分布状況も概ね等しい。

今回は狭い発掘範囲ではあったが、江戸時代から縄文時代にかけての様々な遺構が出土し、福山台地の歴史を垣間見た調査であった。

写 真 图 版





1. 調査前の状況



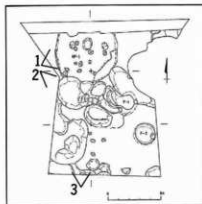
2. 作業状況



3. 遺構確認状況



図版 2 遺構確認状況



1. 縄文住居跡プラン確認状況
火山灰層の確認によって縄文遺構の存在が明らかになった。

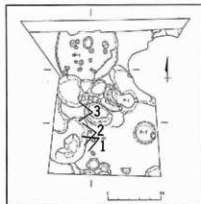


2. 近世遺構プラン確認状況
調査区の南半は近世の掘削によって自然堆積層が残っていないかった。



3. 近世遺構プラン確認状況
土層観察から上部の土砂は築城時と判明した。





1. EP-2, EP-1セクション
EP-2を切ってEP-1が掘削されている。



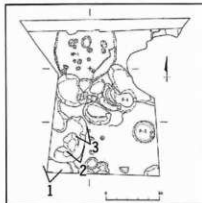
2. EP-1セクション
土層断面の観察から比較的長い時間をかけて、埋まっていたことが判明した。



3. EP-3セクション
EP-1の掘削によってその覆土が切られている。



図版4 SPc,e ラインセクション



1. SPc ラインセクション
土層断面上部に堆積する礫混じりの土砂が、この一帯を覆っていることが判る。

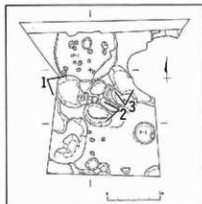


2. EP-1の覆土
水平に堆積する礫混じりの土砂はEP-4も覆う。



3. SPe ラインセクション
土層が水平に堆積していないので水理による影響を受けずに堆積していったことが判る。





1. EP-4.6の土層堆積状況
採掘跡全体が機混じりの土砂で覆われているのが判る。



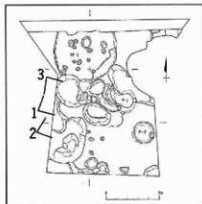
2. EP-4の土層堆積状況
画面右側から機混じりの土砂が流れ込んでいる状況が判る。



3. EP-5の土層堆積状況
機混じりの土砂が床近くまで流れ込んでいる状況からEP-5が最も新しいのかも知れない。



図版 6 近世遺構調査状況



1. EP-3の階段状遺構
画面左側に縄文時代住居HP-1の礎土が見える。

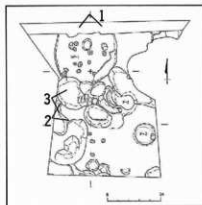


2. EP-1の上層断面
画面右側の壁に唐津二彩大鉢の破片が見える。



3. EP-1・EP-2の調査状況





1. 縄文時代住居H P-1が粘土採掘で破壊されなかったのは、この上部に土塁があったからなのかも知れない。



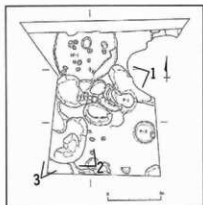
2. 画面奥に縄文時代遺構P-1とP-2が見える。



3. 階段がまったく風化していないのは、短期間に掘ってすぐに埋め戻されたためであろう。



図版 8 近世遺構完掘状況 2



1. 画面左下に縄文時代遺構P-1が見える。画面右側は縄文時代住居H P-1の床面である。

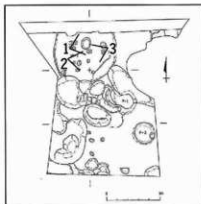


2. 大きな粘土探掘跡とともに、小規模な掘り込みが見えられた。



3. 現地表面、粘土探掘跡、縄文時代住居床面の高さ関係が良く判る。





1. 近世の盛り土を削削して火山灰層を面で発見し、縄文時代遺構のプランを確認した。



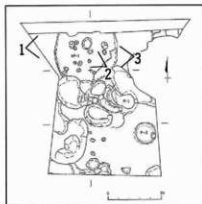
2. 松の根は火山灰層より下位には達していなかった。



3. 点する縄は築城時のものである。



図版10 HP-1 覆土堆積状況 1



1. 覆土中に大型礫が堆積する。
縄文時代後期の遺構面があったの
かも知れない。

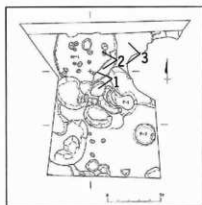


2. 中央右側に火山灰降下以前の
人為的な掘り込みが認められる。



3. 縄文時代後期の遺物が住居床
面より少し浮いた状態で出土した。
1. の大型礫よりやや下位である。





1. HP-1 覆土が陥上探掘によって切られている状況がよく判る。

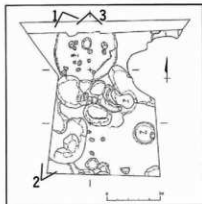


2. 中央の火山灰の堆積によって遺構としてのプランを確認することが出来た。



3. 調査状況





1. 調査状況

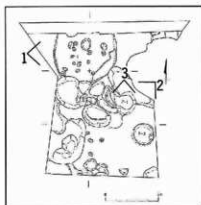


2. 調査状況



3. 完掘状況
中央ピットに大型の礫石器が積まれていた。





1. 画面右上にP-1が見え、画面左の住居跡土層断面にP-3が見える。



2. 画面右下がP-1で左上がP-2である。



3. 完備状況
底面の東方向に浅い窪みが発見された。





1. 遺物出土状況

覆土から多量の遺物が出土した。



2. 土層堆積状況

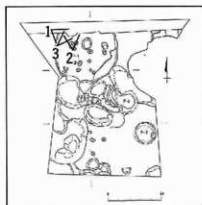
多くの遺物は覆土上位の暗褐色土層から出土した。



3. 土層堆積状況

覆土下位の黄褐色土には遺物がほとんど含まれない。





1. 底面に土留の剥離を発見した。



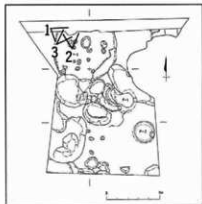
2. 土器とともに底面に窪みのプランを発見した。



3. 発掘状況

P-1と同様に底面の東方向に浅い窪みが発見された。





1. 面左側の地下埋設ケーブルの下に見えられた。

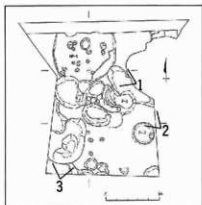


2. HP-1 覆土を掘り込んで構築されていた。



3. 底面付近に薄く黄褐色土の堆積が認められる。





1. HP-1とその周辺

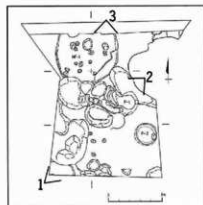


2. 粘土採掘跡E P-4, 5, 6



3. 粘土採掘跡E P-1, 3, 4





1. 粘土探掘跡EP-1

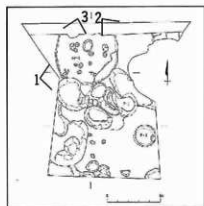


2. 粘土探掘跡EP-1, 2, 3,
4, 6



3. HP-1と調査区南半





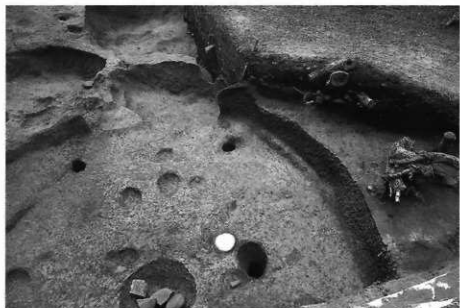
1. HP-1と粘土探測跡



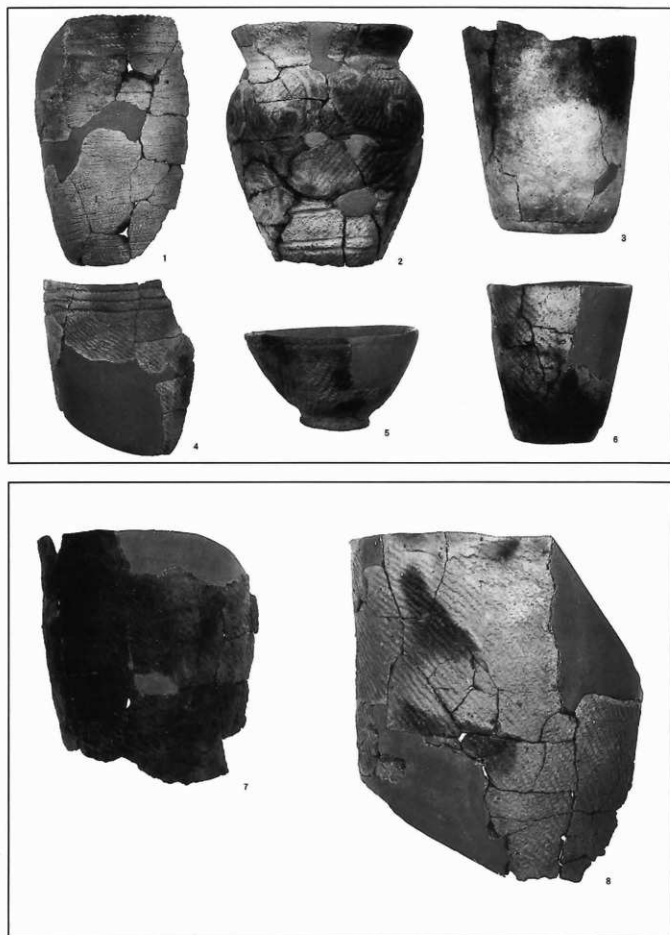
2. HP-1の東面

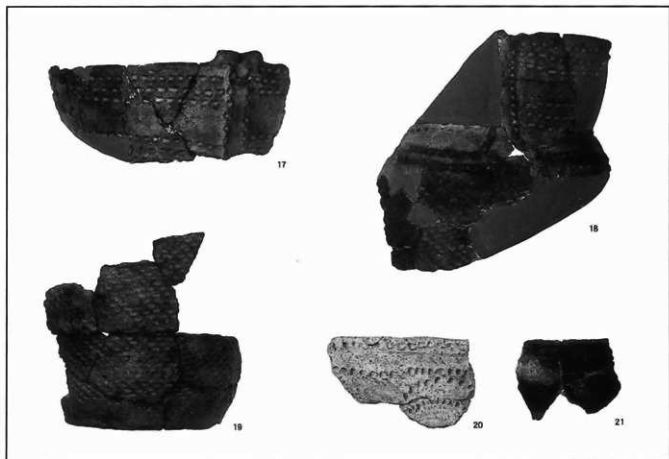
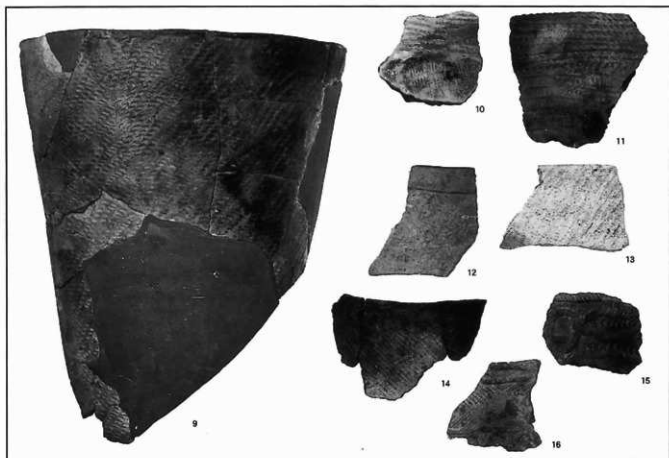


3. HP-1の西壁

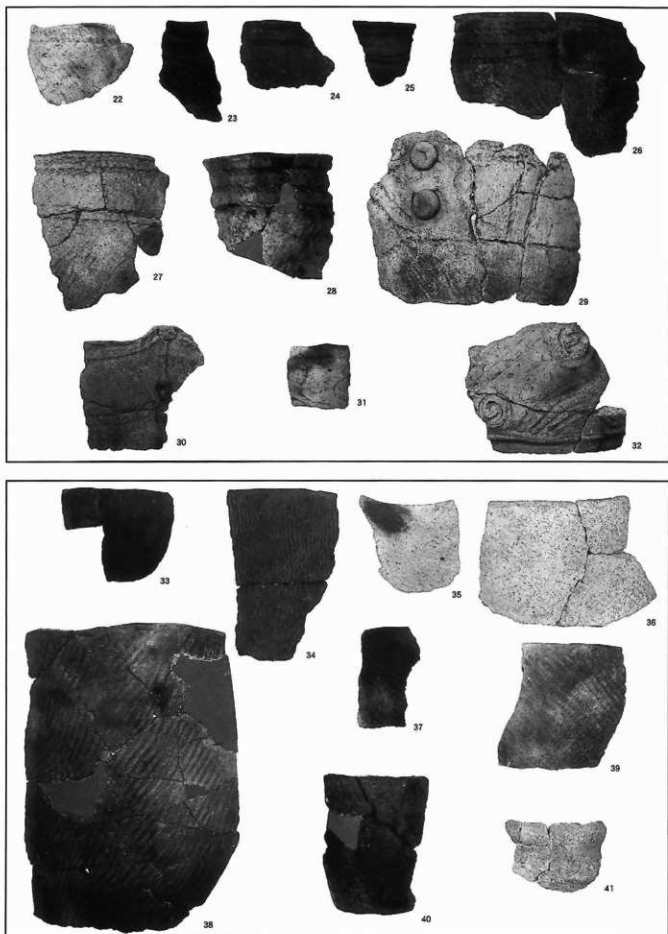


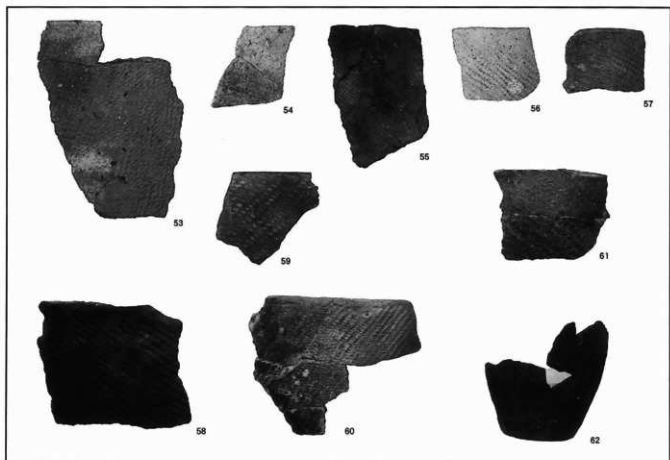
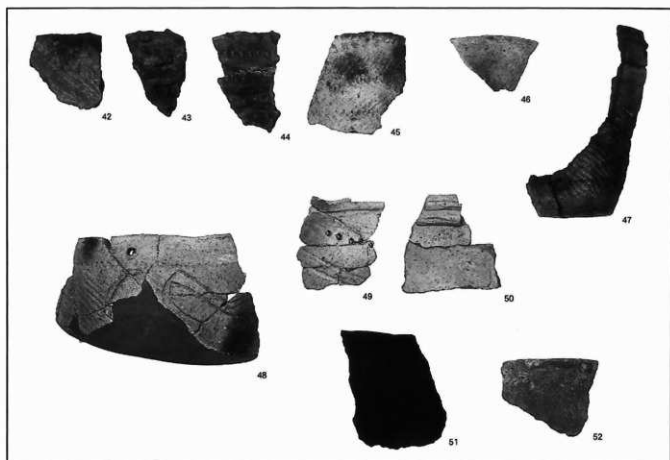
図版20 出土土器（1～8）



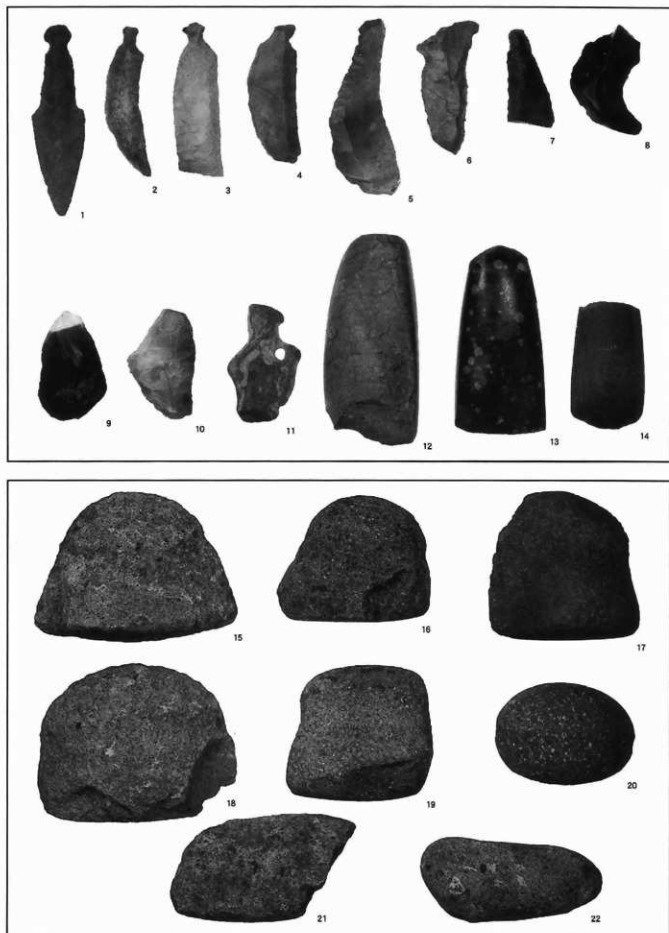


図版22 出土土器 (22~41)

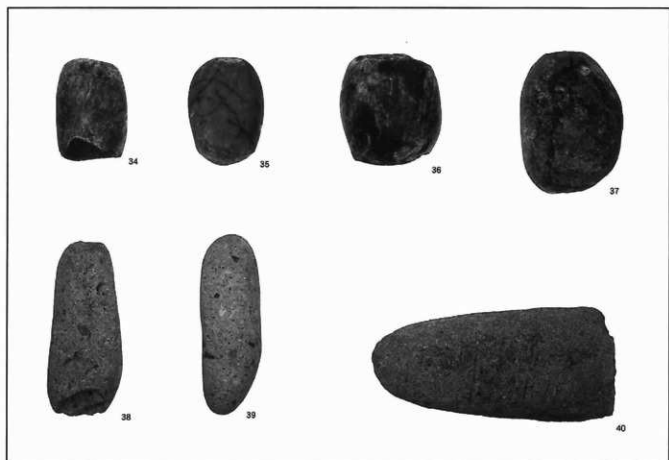
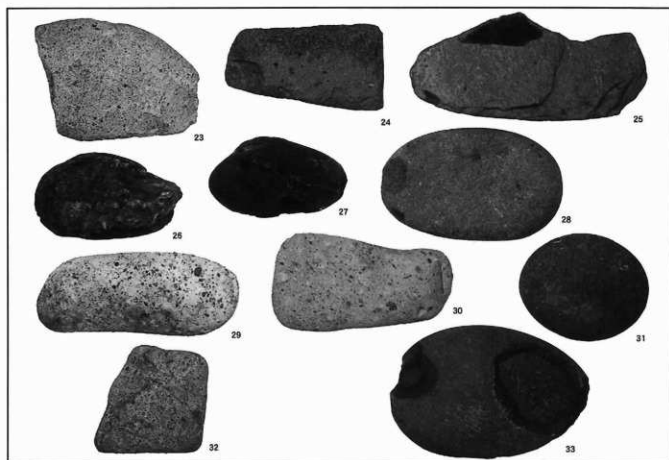




図版24 出土石器 (1～22)



図版25 出土石器(23~40)



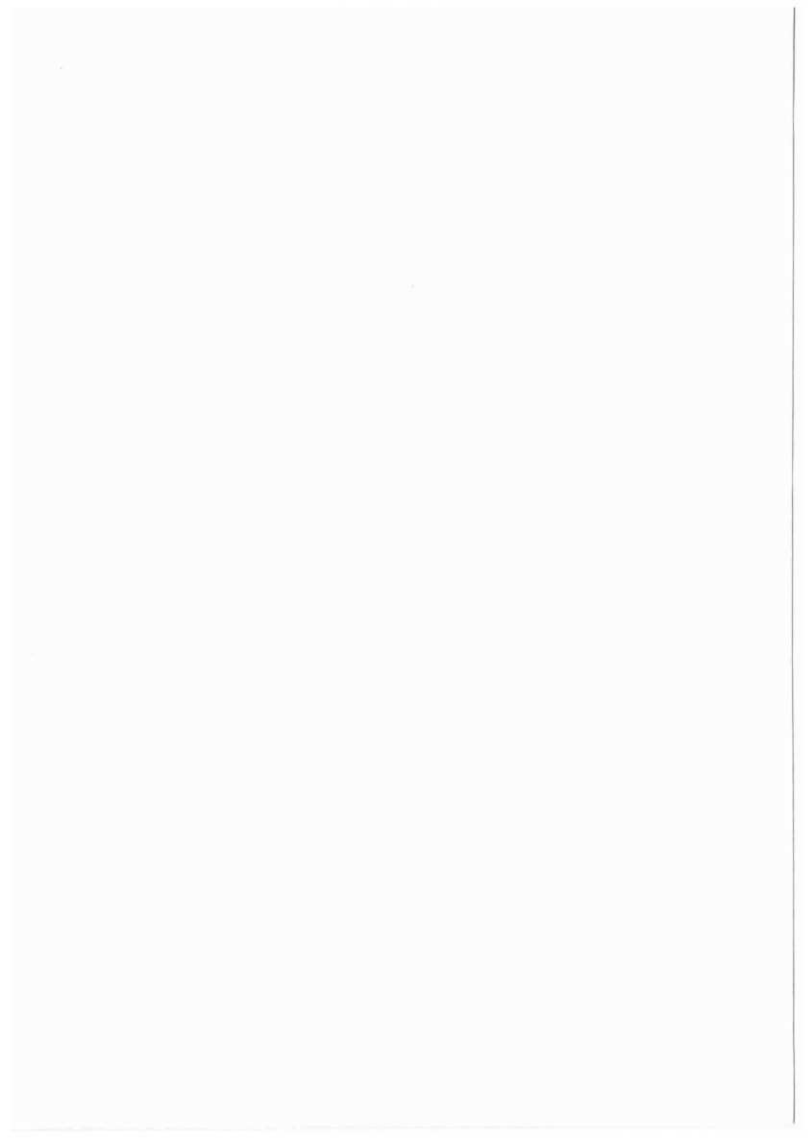
報告書抄録

ふりがな	まつしろいせき							
書名	松城遺跡							
副書名	平成15年度 町道寺町連絡線工事に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ								
編著者名	前田正憲							
編集機関	松前町教育委員会							
所在地	北海道松前郡松前町字神明30番地 TEL. 01394-2-3060							
発行年月日	平成16 (2004) 年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇°〇′	東経 〇°〇′	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつしろいせき 松城遺跡	ほつがいごうまつしろ 北海道松前 郡松前町字 まつしろ 松城	01331	B-02-9	41度 15分 15秒	140度 3分 49秒	20030701 ～ 20030729	130	道路 (町道寺町連絡 線工事)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
松城遺跡	集落跡	縄文時代 後期 江戸	住居跡・土塙等 粘土採掘跡		土器・石器等 陶磁器等		台地全体が大集 落跡の可能性が ある。	

松 城 遺 跡

平成15年度 町道寺町連絡線工事に関わる
埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行：平成16年 3 月26日
発行者：北海道松前町教育委員会
印 刷：カジャ印刷



松城遺跡
平成 15 年度 町道寺町連絡線工事に関わる
埋蔵文化財発掘調査報告書
電子版

2025 年 1 月 31 日 第 1 刷

発行者 北海道松前町教育委員会

〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明 30

TEL:0139-42-3060 / FAX:0139-42-2211

WEB:<https://www.town.matsumae.hokkaido.jp/bunkazai/>

MAIL:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp

底本：松城遺跡 平成 15 年度 町道寺町連絡線工事に関わる
埋蔵文化財発掘調査報告書
(2004 年 北海道松前町教育委員会発行)

この電子書籍は閲覧を目的としているため、不鮮明な図版や誤字が含まれる場合があります。必要に応じて、お近くの図書館等で底本をご利用ください。